

建築家 村山 雄一

階段の舞台

階段はリズムに乗った床である。人の上下を導くこの床は、上と下との階を結ぶ機能的な動線だけにとどまっていけない。

多くの場合、階段室は空間の流れが上下するところであるから、そこだけを図画して井戸のような狭苦しいものになりがちであるが、毎日の歩行を考えれば、住宅の中では階段室こそ家族みんなが歩く楽しさを味わえるところである。

目の高さが段を踏むごとに変わるのだから、その時、目に入ってくる景色の変化を十分に意識して階段を「歩くに楽しいもの」にしたい。

だから私は「階段室」という考えをやめて「リズムの床」と定義している。そして、リズムの床は廊下や部屋とできるだけ一体化させたい。何よ

空間に動きを

②

りも上と下の階の融合は、リズムの床を媒介にして可能となるのである。そして、それによって心地よいリズム感を家全体に反映できるようにした

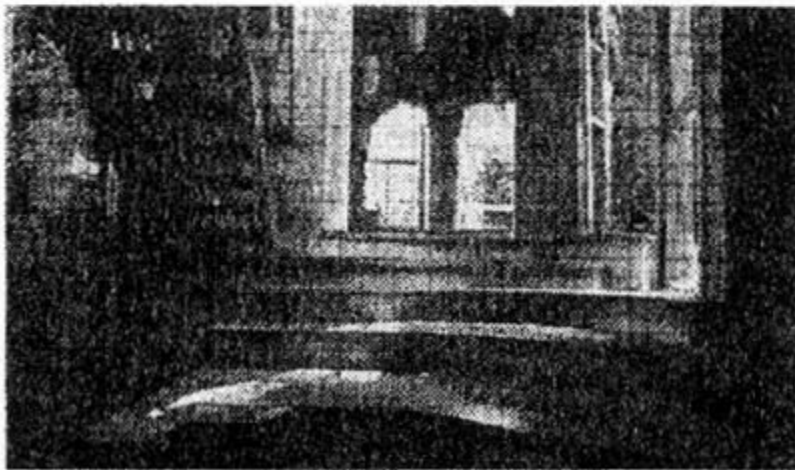
い。分離し融合することは設計のコツである。家はいろいろな機能の集合体であるから、まずそれぞれの機能の部屋を分離し

て用途と広さを定め、合理的、機能的に配置することが設計である。配置された各部屋を結ぶ動線の流れが廊下や階段となる。

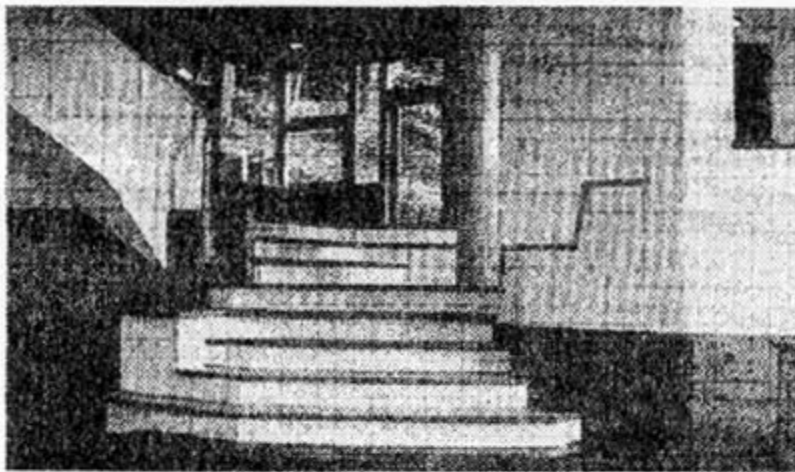
しかし、それだけでは分離し融合したことになる得ない。つながり合わせただけである。このつながりの部分に「床」としての性格を与え、各部屋の

もある。涼を求めてそばに行かなくても置いて、友と杯を交わすことだってできる。子供は近所の友達を呼んできて、ままごと遊びに興じるだろう。

リズム媒介に上下融合



廊下や部屋と一体化させた階段「リズムの床」



いろいろな活用できる場だ(いずれも村山さん設計)

床との共存性を持たせれば、単なる通路でしかなかった廊下や階段は、もっといろいろな使い方が可能になるのではないだろうか。予期せぬハプニングや新しい発見に満ちた、生活に楽しみを与えてくれる場となるだろう。

思い切り広くゆったりとした階段を設計することがある。人はせいたくだと言うかもしれないが、訪れた人はそこに並んで記念写真を撮り、舞台に見立てて歌い出す人

例を日本の住宅の中に持っている。裕福な家では縁側にも畳が敷かれ、座敷につながる床としての性格が表現されていた。冠婚葬祭の儀式も、もし日本の家庭に縁側がなかったら普通の家庭で執り行われることはなかったかもしれない。

廊下や階段がリズムに乗った床として位置付けられるならば、それは部屋と部屋、あるいは上と下の階を結ぶ、現代の新しい「縁側」になり得るのではないだろうか。